

# 佐渡鉱山の推薦書案提出

## 県・市 世界遺産へ4年連続

県と佐渡市は30日、2020年の世界文化遺産登録を目指す「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」(佐渡市)の推薦書原案の改訂版を文化庁へ提出した。提出は、15〜17年に続いて4年連続となる。前年まで七つあつた構成資産を三つに絞り、遺産の価値を明確にして独自性も強調した。7月にも開かれる国の文化審議会で、18年の国内推薦候補となるかが決まる見込み。

佐渡鉱山は15〜17年の3年連続で国内推薦を逃した。昨年の落選を受け文化審議会から、世界遺産に登録されている他の鉱山遺跡との明確な差別化や、構成資産が世界遺産の評価基準に沿っているかどうか論理的に示すことなど計5点の課題が示されていた。

推薦書原案の改訂版では、七つあつた構成資産を西三川砂金山、鶴子銀山、相川金銀山の三つに絞り込んだ。その価値について、鎖国下の江戸時代に手工業による独自の金生産が行われ、そこで培われた技術や

伝統が明治期の機械工業化につながったとし、西欧とは異なる発展を遂げた希少な鉱山であるとした。

三浦基裕・佐渡市長は30日、推薦書原案について「国からの課題への対策をはじめ

め、本登録の際におけるイコモス(国際記念物遺跡会議)の審査にも対応できる内容になった」とコメントした。

国内推薦は年1枠で、例年7月に文化審議会で候補が決まっている。昨年、佐渡鉱山とともに国内推薦を逃した「北海道・北東北の縄文遺跡群」(北海道、青森、岩手、秋田)も、より価値の説明を分かりやすくした推薦書原案を30日に提出した。